

聖霊降臨節第2主日礼拝 5月30日(日)

題 『新しい生き方』

テキスト：マルコによる福音書2章：23～28節

聖霊降臨を迎え神さまの力である聖霊を心に受けて歩みたいと願っています。自分の心の一番奥に、心の奥座敷にイエスさまを迎えたいと願っています。

今週からしばらく、以前からの続きでマルコによる福音書を継続して学びたいと願っています。今日の箇所は「安息日に麦の穂を摘む」という場面です。この場面は、マタイによる福音書にもルカによる福音書にも記されています。大切なことだったのだと思います。

イエスさまの姿と言葉から、神さまの愛の心を受けとめたいと願っています。

◆安息日に麦の穂を摘む

「23:ある安息日に、イエスが麦畑を歩いて行かれると、弟子たちは歩きながら麦の穂を摘み始めた。」

きっと弟子たちは、空腹だったのだと思います。それで麦畑を通りながら、麦の穂を何本か摘んでもみ殻をおとして食べたのです。約2000年前イスラエルの地では良くあった光景だったようです。しかし、このことは当時の宗教指導者パリサイ派の人々には許せないことだったのです。これが安息日に行われたからです。

ところで、「安息日」とは、どういう日のことでしょうか。約2000年前のイエスさまが地上を生きておられた時代は、イスラエルの宗教はユダヤ教の時代でした。

安息日の由来は諸説ありますが、聖書で言えば、創世記2章1節にありますように、神さまが天と地を創造、お造りになり、6日で創造され完成され、7日目に仕事を離れて安息なさった、という天地創造の由来から出て来ていると言えます。またイスラエルの指導者モーセがイスラエルの民をエジプトの奴隷の状態から救い出し、神が示され約束の地に入るために荒野の40年に亘る荒野の旅で、モーセはシナイ山の山頂で神さまからイスラエルの民の今後の生活の約束、規則として10の戒めを受けました。これは十戒と言われています。その中の4番目に「安息日を心に留め、これを聖別せよ。」との戒めがあります。ちなみに讚美歌21の93-3に詳しく記されています。ぜひご覧ください。

安息日は、イスラエルの歴史の中で、ユダヤ教の中では、日常行っている仕事を離れ、神さまを思う、礼拝する日として守られて来たのです。今日の土曜

日にあたります。人間は造られたものとして、神の前にまずは謙虚であることが求められます。傲慢や己を神のように見なす自己絶対化は聖書ではあってはならない罪とみなされます。

また安息日は、イスラエルの民がエジプトでの奴隷状態から導き出されたこと（紀元前1200年頃という説もあります。）、また苦しい荒野の40年の旅を導かれて過ごしたことを神さまに感謝し、民が共に喜び祝う日とされたのです。このことにも重要な意味があります。

時を経て、キリスト教では安息日は、神の子イエスさまが十字架の死からよみがえられた日、つまり今日の日曜日に礼拝をして祝われるようになったのです。

ちなみに日本には戦後、西洋から週に一日は仕事は休むという習慣が伝わり定着し今日に至っています。現在は週休二日、三日。リモートという職場もあるようです。日本の生活スタイルは西洋やアメリカから多く取り入れられて来ました。ともかく、安息日は神さまを礼拝し、共にある人々が喜び祝う日として受けとめて良いのです。

今日の聖書個所に戻りますと、イエスさまの時代、旧約聖書の専門家はユダヤ教のパリサイ派の人たちでした。安息日を規則として厳しく守り、自分たちも人々にも強要していたようです。10戒をベースに、何百もの細かい規則を作っていました。安息日は仕事をしてはいけないのです。

聖書に書いてあることを例にとると、たとえば、寝ているベットを運ぶこと（引っ越しは禁止でしょか）、病人を癒す事（医療行為禁止）、歩く距離もほぼ1K以内（遠足やハイキング、旅もだめなのか）、火をつかってはならない{調理もできない。}などなどの決まり。背けば違反の罰を受けることになります。

そして今日の個所です。「麦の日を摘む」こと。これは仕事とみなされたのです。現代を生きている私たちは、こんなことを聞くと、何とおかしなことかと思う人が多いと思うのです。わたしもその一人です。しかし、2000年前のユダヤ社会はそうだったのです。多く人はそれが当たり前とっていたのだと思います。

考えて見ると現代のことも、未来を生きている人たちからみれば、2021年頃に生きていた人たちが、おかしなことを大切にして生きていたと思われる可能性は十分にあるのだと思います。渦中にいる人たちには、見えない、気づかない、声を出せない、おかしな規則や習慣などがあるのだと思えるのです。

わたしは、ここに自分を一度離れて、歴史を正しく学ぶ大切さがあるのだと

思っています。

27 節でイエスさまは、パリサイ派の人々に言われました。

「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。
28:だから、人の子は安息日の主でもある。」

主イエスは、安息日という戒め、規則を無視はされませんが、安息日は、人がよりよく生きるために定められたと言われているのだと受け取ります。

そして規則よりも命を、愛を優先されたのです。それが神さまの心だと。

主イエスは、弟子たちが麦の穂を摘んでいることを訴えに来たパリサイ派の人々に向かって、「麦畑の穂を歩きながら何本か抜いただけで、あなたがたは、なぜそんな目くじらを立てるのか。」と逆に問います。昔、ダビデ王の行ったことを思い出しなさいと。

ダビデ王は、紀元前1000年ごろに生きた人物で、ユダヤの人々が誰でも尊敬していた王です。「26:アビアタルが大祭司であったとき、ダビデは神の家に入り、祭司のほかにはだれも食べてはならない供えのパンを食べ、一緒にいた者たちにも与えたではないか。」と。ダビデは当時仕えていたサウル王から命を狙われるという逃亡生活の中で、飢えと空腹状態になり、神の宮に入り、祭司しか食べれなかった神に備えられたパンを共にいた人々と食べたのです。その事をが、あなたがたが何より大切にしている聖書、旧約聖書に書いてあるではないか。あなたがたは専門家ぶっているが、いったい聖書をちゃんと読んだことがあるのか、と厳しく戒められたのです。

余談ですが、この話は、旧約聖書のサムエル記21章1節以降に出てくるのですが、実際はアビアタルの父親のアヒメレクという人物です。26節では「アビアタル」のことだと言われていますが、きっとイエスさまのことばが伝わって行く中で、違って編集者マルコに伝わったのだと思わされます。

ともかくイエスさまは、

イスラエルを長年苦しみの旅の中で守られた神、これはわたしたちの人生の旅と受け取ってよいのです。神さまは、天と地をお創りになり、人間や動物たち、草花を造られた神さまの愛の心を何より大切にされたのです。その神さまの愛こそが、10戒の根本精神のであり、まことの愛、神さまの愛は規則を超えているのです。

イエスさまは、隣人愛を安息日規定よりも優先して生きられたのです。

これが福音であり、良き知らせなのです。この福音に多くの人たちが救われたのです。わたしもその一人です。これは今の時代にも通用する教えです。

しかし福音を喜んだ人たちもいれば、それを受け入れるどころか、反感を持った当時の指導者たちもいたのです。現代でもそうだと思います。

イエスさまは、規則が支配する時代状況の中で、十字架に至るまで、神さまからの光を受けて、真理と命と愛に生きられたのです。いや死に至るまで神さまに従い、神の愛の教えを身を持って行き抜かれたのです。

そしてよみがえって今も生きておられ導いてくださっているのです。

「この人を見よ」と讚美歌にあります。この人＝イエス・キリストをしっかりと見てわたしたちも、教会もこれから先も生きて行きたいと願うのです。

神さまの愛と真理と命の光に導かれて生きて行きたいと願います

24:ファリサイ派の人々がイエスに、「御覧なさい。なぜ、彼らは安息日にしてはならないことをするのか」と言った。

25:イエスは言われた。「ダビデが、自分も供の者たちも、食べ物がなくて空腹だったときに何をしたか、一度も読んだことがないのか。

26:アビアタルが大祭司であったとき、ダビデは神の家に入り、祭司のほかにはだれも食べてはならない供えのパンを食べ、一緒にいた者たちにも与えたではないか。」

27:そして更に言われた。「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。

28:だから、人の子は安息日の主でもある。」